

911.32
才上

奥袖道常抄

上

序

餘既之廬之後、而少不也
主策、雖有歸宗、而失其
其極、徒能者法繩之主、傷
之原、也屬文、之附之故、以不至、不
常言、亦非所之說也、空空以

あら幸と良縁をうながす友人某堂
居主人は而詳くて古研究想居
手稿不存以逸而主人も承
ふ一の出来紙、母以原
本我ちを心に篤厚か



うすみとあらりと、やめとうとる、うる、うる、人
のきみかへりてそぬふくもぬくもぬくもぬ
いと、もめらむ一さるきひひひひひひひひ
の山かひか一おれ川くまにまくもぬひひひ
めあらくさん、一あらまうてゆくもくんぬく
たよあらむ、一あらぬくくせおのうつりうく
よくおのうしみへくとせきうとくかど
あるゆりをくはのねむと努みちのくいて

それすれども誠乃さうひまくみえくを
やさしくてからくもむほなまはせのあ
らまゆうのいゆからまけて、いとま
すすめゆそともうすせ人のすれゆを
ゆひがくゆふとがの名と誠乃名の
あり、すりうよきニタリしまれをやゆあ
と葉笠庵のあす、のうじうをばあみの
あくゆうゆうとおう是をわいせんうし
ゆうひくとあ川あせゆあ、やのと

河内川のとくとくぬれともがいゆを
ぬほのくあれゆーーーのいとやのくすれ
とれまよあけくちのあとからう(ち)
の海乃かくせせさくを重てとくとく人のゆ
きくよだちあさりやまんゆくとく
もくにけ書けぬせすうこくとゆはせはハ七姫
すも君とねをくらふりがねすとよみ
とく一姫とくらひくちとくのくわとま
の葉乃わらうぬと旗瀧ヨツリヨヅルのくわゆと梨瀧ヨヅリヨヅル

五ノホン

さうこーせ来たふらの人の道とすもりて人の
情を治ると云ふふく乃治ゆもけひぬゑ
うれあひゆ地ハ人ふらきくわづむそれ今
天地ふら祭えり傳ふるがおきのたもゆ
ゆくつまきてくめぬきくすゝ、又ぐのとう
きやくまんやとこのあとゆえつかまねばく
きーても南みかへはちゆすすかぢりぬ
勅傳燈佐佐宿を應堂上人捺毫於日體
峯源紫園

経香
元羽

ふらのとくらふらおはるせーすとく
えーすとくらふらのはくふくやくうじんと
せかりりつとあきくにしたとくはる
とくーあつはるおれすまくはるまくおれ
トトはーくいとより九九/
おうれゑつアリ^シとくはるまのを
ともゆーはるよはとふといのある
すくおはるよーはるよはとふといのある

かかうつてひたゆゑ、じゆき
一叶千葉の木の枝ともと
ねつは園へまくちゆくからんをと
そやくらゆる跡もくまへゆとゆの
あがてよ地也とくわざまなみゆく
ほるまの重慢まくはよへおめりゆく
小ワキめあめのくもる花もあひと
平川をまたがふゆく足せり葉もれと
うときと様一もくのれども

うくれーもくやナシモレバ
あひにあはせハサヒテテのとくを
トクニテモアヒルムキシテテウツモ
アヒルモアヒルムキシテテウツモ
め、ル申セセキタリ未シヨリムル村
のアヤセ小野タケシ老ム同院のかすみ
アヒルとセ一ツリカニ叙レ



九例

○以すや小夜もる不半てねすり古ニテナのと
を举てふゑる我をくま一々述がれハ他事の
御事かと未殊ある。あと則程年宵壇おあらひを
とおゆくあきりけをどみほちど乃す少しつきで
坐きとまが人のやうきちあくしよもむかわうよ
うれともよひる。あはせ

○あるのヲおねがひるらのと呼び、あはせは
れすらにけり老ぬるふるびーあふるよくもあ用
のととあく。くべーくらば

○花の傳よのうがよ縁てはぬとす。萬葉集
○浮きの上半生ふ艸するよもいふー色葉中安山

乃の文直すとくのふ奪りんちはらへとくと
つゝーもおりじどりやのくらへとばすりこく
小刻廻りゆきまくらひゆきとが小みせ仕事シヤムシと
ほづるアガルかがくのことぐらみとくにくわくす
ーくもとを小えりあふこくすいよーあくすと
其文愈はげりゆーさん人ちけとありルモ
○以またむかみりふねおとせのゆと持ーされ
印板ひりかめくすあくせ行くちくとがりふやほドミ
キこあくすうらせぬすをとよのとと奉て
全文と化さばアスモトドリヒテとあバのあす
本ちと儀やくちと考ふ事一

凡例畢

俳諧系譜

此系ハ唯俳諧傳來ノ次序ノミ
ニテ門風ノ統系ニハアラズ

守武

伊勢荒木田神主本連
歌師俳諧式始于此

宗鑑

俗名志奈跡三郎住山崎
本連歌師後爲俳諧家

宗祇

号自然翁又曰種玉菴本
歌人好連歌兼俳諧

貞徳

松永氏号長頭丸俳諧
師撰御幸クロ、等

貞室

安原氏号壽軒俳諧師
撰玉海集獨吟千句等

季吟

北村氏歌學所撰
埋木水鏡集今云增
山井

芭蕉翁

又号風羅坊名
桃青詳傳記左

芭蕉小森傳

祖翁ハ伊賀、岡松植之子也。父一丈、孫吉宗清
の末裔お種つる家臣宅地の跡なりと云ふ。先ち松尾連志と云ひとて也。
次男少く正保元年生。初の名ハ中七郎。忠左衛門家
房と改む。其の実名を祖家の清乃もとある。故すまやと室をめぐれ年もはまくもとあるときまん都まこと
云へばお下向のはあくび。國守高重がゆき同姓同由レシテ謀
士高重新七郎。精乃はとちりより嫁ふ五
斗三石他名。一月仕す。憚呼子ハ法狂寺の御小僧
詔とまひやなるかふしめしまくわせの入く。

いぬとさゆのせらゆうのい

とあるはや一、十の葉けはありとせ昭和二年夏をせらす
ばやふは不幸か。すむ實ふにゆけの日本を至
一の本よどみ君臣の風雅乃縁。一うじゆく娘
娘の、ゆかりを身に置く。もと小毛と報恩院よ
のくらは公其はゆきの不透世計をありてや
二君お仕えねよ」と告あそびけんと乞やうけと
あくやま。あくよーかす。秋をす同僚林孫
大まとふよ。門子経冊を粘一尋

かとひきり友のやるうせつ

と一とあー園とまくは附年二十三年都ふのわりま

は附年二十三年

都ふのわりま

一

附ふよおせす根(手)一其(後)東(手)一(手)あり(手)一
うりとあおがふあ(手)ぶ(手)船町のうち八(手)町と(手)まの長トア(手)と(手)御士(手)
文(手)す(手)彼(手)者(手)い(手)ハ(手)又(手)トア(手)と(手)名(手)一(手)姓(手)サ(手)人
も(手)あり(手)一(手)歩(手)故(手)の(手)一(手)す(手)芭(手)蕉(手)小(手)金(手)一(手)东(手)一(手)仕(手)り(手)也(手)
が(手)ど(手)の(手)う(手)化(手)と(手)服(手)と(手)か(手)く(手)お(手)の(手)友(手)更(手)と(手)一(手)凡(手)人の(手)も(手)信(手)
み(手)く(手)其(手)任(手)と(手)續(手)び(手)れ(手)廢(手)ト(手)也(手)と(手)川(手)と(手)西(手)千(手)海(手)
御(手)と(手)て(手)業(手)と(手)一(手)ヤ(手)ル(手)と(手)文(手)並(手)海(手)と(手)ぬ(手)と(手)是(手)當(手)室(手)
あ(手)も(手)ハ(手)一(手)送(手)す(手)町(手)せ(手)令(手)と(手)考(手)す(手)川(手)み(手)ら(手)省(手)場(手)
也(手)ソ(手)リ(手)モ(手)う(手)云(手)ト(手)大(手)令(手)と(手)ま(手)名(手)人(手)
よ(手)ト(手)ひ(手)と(手)大(手)和(手)二(手)年(手)まで(手)住(手)い(手)ト(手)る
け(手)七(手)年(手)

平(手)三(手)九(手)、生(手)四(手)孫(手)災(手)火(手)あ(手)ひ(手)あ(手)ま(手)九(手)甲(手)列(手)

劫(手)は(手)國(手)と(手)あ(手)め(手)と(手)夏(手)の(手)末(手)あ(手)ま(手)
深(手)川(手)名(手)高(手)地(手)一(手)海(手)と(手)根(手)あ(手)あ(手)と(手)い(手)芭(手)蕉(手)
一(手)り(手)と(手)桔(手)

と(手)成(手)室(手)今(手)一(手)興(手)よ(手)と(手)く(手)れ(手)

の(手)壁(手)の(手)學(手)と(手)り(手)て(手)伝(手)と(手)芭(手)蕉(手)と(手)ア(手)フ(手)

人(手)く(手)も(手)や(手)との(手)か(手)と(手)ハ(手)御(手)一(手)れ(手)と(手)物(手)を(手)取(手)

え(手)あり(手)て(手)矢(手)あ(手)と(手)云(手)江(手)都(手)と(手)私(手)一(手)ア(手)火(手)
張(手)り(手) ほ(手)年(手)平(手)一(手)火(手)並(手)す(手) 月(手)平(手)勢(手)御(手)義(手)と(手)難(手)う(手)か(手)つ(手)

上(手)野(手)子(手)の(手)一(手)立(手)貞(手)享(手)二(手)年(手)の(手)ま(手)も(手)大(手)和(手)

也は京師にて嘗て經り一
立陽元日ノ年ノ秋晦ノ辰ノ日
多事之上りて、一月速後小文即ち是ニ次の日又
えと改め、又と號と号に、年ノ八月未の本始
一月正月二年の東北山河跡実相馬守
年正月十日、越後守、又は源氏、張伊勢守と名々大津小
色と號す。二年の友石山のとくよ幻伍菴哉
むすしは、色の林海より、アリ、風毛皆吉等著
ロ化ライは、秋山
庵と號す。あるより回七乃歎東船屋經
三ヶ年也。

芭蕉はをかと称せむす、去來は旅庵居す
も、其角あす渡るる今後はあきは乃
名みゆき事ばいよ／＼かくはゆ回つ處人々
師とまこととふのにありあ化門乃人
我より向う當／＼と稱せゆゝ事ゆハゆ
仰さりちゆの御事とせんとてをもあらうり
無モばつ人のもゝれを記すふゆすうす
く無モ出さんひ翁とまつ／＼とく「アヒト」拘者
の古佛寺子成高歎と云ひて有はれど其僧も云
今ハむづち遙れおがすれとしゆのうりゆゆのあがれゆす

和からむとタミキタミ老のす波るきとく／＼滑稽の写小
やうえ／＼てはゆよ其ちありとありぬやぢきふゆふと
あよわすれこくこくいとしひ古廟も世男みせんかのねまハ
あやうよ上まるるとキ／＼アヒト
芭師とおと称ちゆきハあれ能ハ學府又其宿小豆トある牛
ベ一廿ハ天和二年又ノ祖翁社事秋葉の十葉ニ満すうと
はすとねりやむ作るの大治ハよ／＼おもやまき尊一

傳記畢

芭翁とおと称ちゆきハ學府の草江
孟子東がち去來ハ波り以本事も今誠その証
の津乃佐士垂頭不持ほと云を東板本の芭翁小京師の様夏坊書
あ波と加へてとも全く本とあ等

引用書目

老子經

莊子

書經

詩經

易經

大學

朱熹序

周禮

論語

荀子

孟子

孔子家語

韓非子

春秋左氏傳

國語

吳越春秋

史記

前漢書

晉書

爾雅

說文

劉熙釋名

玉篇

字彙

正字通

書言故事

尺牘雙魚

六韜

楚辭

文選

杜詩全集

杜律詩集

唐詩選

三體詩

白氏文集

古文前集

同後集

陸璣詩疏

圓機活法

山海經

神異經

博物志

淮南子

列仙傳

白虎通

風俗通

西京雜記

桃源記

桃中記

世說新語補

本草綱目

五雜組

太平廣記

四部稿

熙朝樂事

歲時記

類書纂要

中臣祓

日本紀

續日本紀

續日本後紀

古事紀

舊事紀

古語拾遺

藤森社緣起

前太平記

東鑑

源平盛衰記

源氏一統志

年代廣記

朝野群載

鰯夷志

大日經

金剛經

楞嚴經

阿彌陀經

法華經

涅槃經

大智度論

五分律

法苑珠林

釋氏要覽

祖庭事苑

傳燈錄

元亨釋書

萬葉集

古今集

後撰集

拾遺集

後拾遺集

金葉集

詞花集

新古今集

新古今集

新勅撰集

續後撰集

新古今集

新後撰集

新千載集

新後拾遺集

夫木抄

西行山家集

同家集

清輔奧義抄

同袋艸子

拾芥抄

八雲御抄

祕藏抄

顯註抄

無名抄

童蒙抄

袖中抄

歌林良材

藤原系圖

百人一首抄

名所和歌集

名所方角抄

連歌產衣抄

源氏物語

伊勢物語

枕艸子

徒然艸

古今著聞集

和漢三才圖會

通計百二十三部

以外俳集俳書若干

奥納道芳草抄上

越前丸岡 葉笠菴集一捲

タリハ、る代のをあつてりうひも又旅人

也古文後集春夜宴桃李園序夫、天地者萬物之逆旅。光
陰者百代之過客。ト天地ノ運旋日月ノ行道ヲ旅ニ
喻逆旅ハハタゴヤ光陰ハ日影ノ
ウツリ行ト過客ハ旅人ヲ云ナリ。余のよよ生涯を

う。如レ莊子吾生也有涯是ヨリ
是下デ序中。古人も多く旅小記ある

ゆり發端ノ詞也詩二十片孤雲逐吹飛

片雲ノ風うちうりはせてト云風情ナルベシ漂泊二字皆タゞヨフト訓ズ
漂泊のよひやらずサヘヨヒアリクフナリ

うすの音も伝へぬ代りひかる

以上ニ付あらず上正のやうふとすあふ難ど高
ものあひ乃は年をとうりとぞあと入を不ともせ
よどりてげづれりと云勿論誰がおおはれもそ
うれし人取以一箱すふ一箱ハ大小の名と取
うふが年をせつ收容者定よりよとのありハ年
年歲歲花相似歲歲年年人不同のうぢ

人生おもあきと
想の壁が你我一

西行との往来

346
の段
せし

お七日
のけうちあ

のまわせ物
アマリヒトムハミサムヘ先たさるゆゑノ源
御所第本草の文書
氏

ハアハア來不一の事也。不二の事ハ富士
郡ニ在。兼木皇五年六月一更。山ヲ云駿河國

木花開耶姫淺間權現ト稱ズ鳥居ノ額ニ三國第十一山トアリ故ニ又不「一山」ニ書勿論名所ニテ世人ノ知所ナリ上野若干中の少乃指上野ハ東都ノ艮ニアリテ山ヲ東嶽ト云寺ヲ寛永ト云寛永年中慈眼太師開基ノ靈塲ニテ西都ノ比叡山ヲ摸^スト云此地舊ハ藤堂家ノ館地ニテ地勢伊賀上野城ニ似タル故ニ此名アリト今山口車坂屏風坂ナド云アルハ皆伊賀上野ノ坂名ナリト云谷中ハ上野ノ西感應寺ト云天台宗ノ大伽藍アリテ上野ニ隣ル此

兩處ニハ分テ花木
多遊觀ノ地ナリ 穴ドウリツドウリツ
ヨリ聚マムトコモトモト
ルナリ 千住ト書奥州往還
最初ノ驛宿ナリ

此五字ハ必詩文中ノ一句ナ
集此去三十千里ト云意カ前ハス、ムト訓
ズ途ハニキニテ前途ハ行先ト云フナリ幻のちもニ
経ニモ如夢幻泡影、如露亦如電ト說テ俗ニ
夢ノ世ト云ガ如ク人生ノハカナキヲ喻フ

り考や名筆第一急の向ハ洞

杜甫春望詩感時花濺淚恨別鳥驚心
古詩王鮑懷河岫晨風雲思北林古樂府枯
魚過河泣何時還復入芒

奥羽ハ陸奥出羽ヲ云行脚ハ傳
燈錄ニ古靈行脚ト云リ旅行修

行ノノノリテヨウタツノルトコトアムトドモ
ナリ

天雪履芳楚地花ト云句アリ白髮ヲ雪ニ喻ルフハ和

漢ニ例多シ○按ルニ此吳ハ或ハ五ノ字ノ誤カ五天

ハ五夫竺ヲ云三體詩五夫

到日頭應白ド乃此意ナリ

列傳云之のハ浴トヨシテ浴ギ

神社ニテ下野國總社村ニ立室

八嶋太明神ト號ス祭神富士淺

間祖神ト云乃木花開

耶姬ニテ下ニ見タリ因レキヤヒト曰

訪の事也

東氏小遊業一翁

隨才妙人あり

本のむさくや姫の神トヨテ

中宮のハ浴トヤ

日本紀云時彼國有美人名曰鹿葦

畧

津姬亦名神哥歌津姬亦皇孫因而棄之卽

一夜而有娠

皇孫未之信故鹿葦津姫乃忿恨作無戸室入

居其内而誓之曰妾所娠非天孫之胤必當盡滅如實天

孫之胤火不能害卽放火燒室始起煙未生出

之兒號火

闌降命次避熱而居生出之兒號火

火出見尊畧無戸室

ハ俗ニ塗籠ト云ガ如ク物ト讀マヘトモ此の
出入ノ戸口十キ家ナリ物ト讀マヘトモ此の
謂也

謂也 あてハ藏本実けが廻トヨリ直すあ載新古ノ廻ある
を考ふ不ぞより一役す以ゆ申子清めりり其れ氣ぬニ
此の氣りくらうは是と定ハ浴トヤ極ム云セぬニ
きうと云々と極ムス 来レリ俗間ニ鰐ト書ハ鰐ノ
誤ニテ鰐ハ字書ニナシ是等ノ類ハ多ク小野篁歌字
盡ド云書ノ過失ヨリ出是書ハ童子ノ手へ授ケベキ
モノニ非ズ○ひづ学ま小伎事より公川奈一文殊とモ
テ卫門と云ひすれども少ちいからずのああでけるや(すすり)ア成
れば父もも亦ちいからずのああでけるや(すすり)ア成
れば縄魚と多く括入く(レ)成被縄魚とく(レ)成
怒ばよきと云う(レ)お仕教えより(レ)園の宇乃
縄魚のハ根もそのくすく(レ)お仕教えより(レ)園の宇乃
人成被縄魚とく(レ)お仕教えより(レ)お仕教えより(レ)

とがふ乃あらよつふドヤムんけよ十訓およそて侍る
えもこみそうハ子代ふくふ乃うりとまうしげふ上りうく小
くハつふ

トシム

別後
心身ゆえの極す済。日光山ハ下野國河内郡ニ在
人ナリ東都ヨリ北三十六里 済世華土小示況一
五濁惡世ト云是ナリ五濁ハ眼耳鼻口心ノ塵汚ヲ云或ハ色塵聲
命濁ナリ五塵ハ眼耳鼻口心ノ塵汚ヲ云或ハ色塵聲
塵香塵味塵觸塵ヲ云庄五濁五塵庄ニ皆娑婆世界ノ
惡ムベキヲ目ス示ハレメスト訓ズレテ見スルノ略
ナリ現ハアラハルト訓ス濟渡ノ爲ニ
アラハレ在ヲ示現ト云佛經ノ語ナリ、
來門ハ沙門ノ音譌ト正直偏固ハ
云沙門ハ僧ノ梵語也 正直偏固ハ
遍ト云ガ如レ偏固ハ
片ヨリ傾クフナリ 剛毅木訥乃仁ヨウチウキヤギ
ひ

論語ニ剛毅木訥近仁トアリ剛毅ハ氣象ノジヤウブ
ナルナリ木ハ樸ト通ジテツクロヒカザラヌヲ云訥
ハ言語ノ無調法ナルヲニテ 氣稟の法變々 氣稟ハ
何レモ律義者ノサヘナリ
學ノ序ニ其氣質之稟トアリ人生付テ稟得
タル氣象ヲ云清質ハ潔白ナルカタギナリ

御自第の返

従昔以沛山と二荒山と尊と云海大師

空海ハ弘法大師ヲ云元亨釋書云

釋空海世姓佐伯氏讚州多度郡人

父田公母阿刀氏夢梵僧入懷而有身在胎十二月寶龜

五年生焉母思其夢小名曰貴物成人之後就沙門勒操

受法而落髮初名教海後自改如空延暦十有四年登東

太寺壇受具足戒又改空海二十有二年從遣唐使入唐

元和元年秋八月歸太常太上皇入壇灌頂帝者密灌於

汎始焉弘仁七年遊紀州相勝攸上高野山創金剛寺承

和二十年海在于此三月二十一日結跏趺坐入定延喜二十

五年冬十月賜謚弘法大師大師國師ノ号ハ睿帝王ノ師トナレ
然ナリ故ニ多ク死後ノ益ニ賜フ卒

海ヲ日光山ノ開基トシ及ビ山名ヲ改ルノ
ト日光山記其外ノ書ニモイテダ所見ナシ恩澤八
荒よりハルル恩澤ハ卑俗ノラカゲト云ニテ慈恩ノウ
南子等ニ出テ荒ハ遠方ヲサス
八荒ハ四方四隅ノ俗ニハ方ト云遠處ナリ 四民安堵の柄被毛レ
四民ハ士農工商ヲ云前漢書食貨志ニ見タリ安堵ハ
通ジテ案堵ニ作り歴史中ニ散在ス安居ニ同ジラチ
ツキテ居ル
ナリ

阿婆山ハ有ヘテアリテ
モツムシハ上御云ミサキ名ナシテ上御
ト聖乃後ウタリ 薩摩今ひももむら
シトモウタナベトモ本サトホタルトモボ人丸
シトモ先の者ノ坐テヤウチカニモタマニルノ比
薪水乃勞トセトモ
晉書陶淵明傳云陶潛爲彭澤
令不以家累シテ自隨送一力給其子
曰遣此力助サカシ薪水之勞ト力ハ僕ヲ云薪水トハ朝
夕飲食等ノヲナリ又釋尊檀特山ニテ阿羅羅仙人ヲ

師トシ事ヘ採果汲水ノ業ヲナムト訓ズ
シ玉フトナドノ取合セナルベシ松ノ木多治の眺見也
眺望ヲ云スワアシテ木々之を繁
羈旅ハ羈ニテヨルト訓ズ羈ハ假音
ナリ羈旅ハ旅ニ居ルヲ云左傳ニ見タリ岩洞
の頂ちと名流一ト洞ハ峒ト通ス岩峒
小窓一石碧ハミドリト和訓ス瑠璃色ヲ云潭ハ淵
ナリ水ノ深キ處ハルリ色ナルモノ故ニ
名ク岩窟ト訓セリ岩窟セイ

勢田川源子の御ゆか夏の物

岩窟モイ
ワヤヲ云

夏ハモト結夏ト云略レテ夏トス僧家ニ
籠居テ修行スル時ノ名ナリ五難組云四
月十五日天下僧尼就禪刹搭挂謂之結夏
又謂之結制又安居ト名ク釋氏要覽云心

卷之三

形靜攝曰安要期此住曰居ト安居ハ物寂ニシテ居ヲ云○友人僧懶菴云天竺ノ一年ハ春夏冬ノ三季ニテ秋ナシ故ニ一季ハ中華ノ四个月ニ當ル中華ノ今月十五日ヨリ翌月十四日ニテラ一月トシテ上十五日ヲ黒月ト云下モ十五日ヲ白月トス中夏ニ上弦下弦ト云ガ如ニ一夏九十日トハ夏一季ノウチニテ結制スル日ヲ云九十日ニテ一季ノ盡ルニハアラズト

那波の忍者と云ふ
某が其の如きを破り
より堅城小うアレ
け地ハ恐れ此と云々不あり木立
モホツマ信実 那波といへども野ハイヤシト訓ズ野夫ハ禮義
也。ラヌ輕キモノ、稱ニテ今
民間ニヤボト云詞
モ是ヨリ出ルナリ以テ那ハ猶様スワリ也
船に附
モ多キ

子ハちの古け馬のマサマサ不思議と云々と
おひそかにうりけ馬のマサマサ不思議と云々と
うりけ馬の馬ハ老とある。よもやう韓非子云齊桓公伐孤竹
春往々に還迷惑失道管仲曰老馬之智可_ト用_ク耳
放老馬而_{シテ}隨_ス之遂得路_ヲ名と云々と云_スの化皮_{ヨリ}鬼怒川のち
有鬼_ノの事か_シゆくと云々と云_ス小姓乃東老一乎_シ
後の大原時代おもづくと云ふ川も亦呼あひりを一
波代ハ峰代のや_シ一鶴_シ

味を以て 郊かより道を以て 大迷物の如く一見

一粒の石とウケテ玉藻乃の古墳と云
郊外ハ字書邑外曰郊ト村バナレノ野地ナリ道遙ノ
成語ハ俗ニ熟字ト云莊子ニ見テ俗ノ氣バラシト云意ブラク
遙アリクフナリ犬逐メシテ御陵の狐城射んなの舊古
よりと殺生石ナシシカエホウリ式ハ東懸トテスアリ
形ノ原ハタチシ方角也ヨリム敵を底矢ミツテテスアリ
上にリリカリリカリリカリリカリリカリリカリリカリ
才圖會云近衛帝冬壽年中丁夕宮中管絃之夜燭滅時
帝寵妃玉藻前身放光帝自是不豫安部駿詭上之曰是
玉藻前所爲也于時玉藻化狐逃東國因詔三浦介義明
千葉介常胤上總權介廣常驅其狐於下野國那須野義
明射殺之爾後百年餘狐靈烏石世俗曰殺生石觸其石
則鳥獸人民皆死時有僧太徹者欲止石怪而不能焉後
深草帝寶治年中詔僧源翁即源翁到石傍題偈舉拄杖
卓一下石忽破碎其夜一女子現謝禮曰媼得淨戒生天

言訛漫矣一說ニ此事實ニアラズト云
墳ハ塚也又ハ訊ノ字ニテ尋ルフ也ハ幡言コラ指
形ノ原ニモ温泉ナリ形原の原と云有小学山と新湯山と号
ニ幸ミモ湯山日山ちと云山上ノ丹黒柱理と墨並ヒ八幡モ
ハケル乃萬古アリニ彦弔天皇御母也室を祀御相殿ハ神功皇后也
舊事紀云應神天皇諱譽田皇太子者足仲彦天皇仲哀天
第四皇子也母氣長足姫尊_{神功}則開化天皇五世孫也和
漢三十才圖會云欽明天皇三十一年祭靈於豐前宇佐而
後稱德天皇之時和氣清麻呂詔宇佐神託曰我是譽由
八幡丸也自是有八幡之號ト又或說ニ天皇出生ノ時
八幡ノ幡ヲ立テコレヲ祝ヒ帝廟の神と封一付
ス故ニ八幡ト稱ズ庄云

那須ノ字ハ字も乃彦不一也我祖の家臣もすう西列塚也
小く御名約とあくまでも御主體兼ねのやれんはつもあ
ておの／＼ある所也アリ事くある事す勿論ね
ソホアリ今子を存ひり／＼姓名あつ＼＼のと
感應ノ成語ハ易ニ出テ心ニ纏_{アリ}愛スル
ヲ云感ハ心ニ激スル所アルヲ云應ハ

ウクルト訓ジタルト訓
ジ感ニ依テ來ルモノヲ云

ジ感ニ依テ來ルモノヲ云

修驗トハ俗ニ云山伏ノ事ナリ羽州大沼山修驗蠻鷺ノ説

修驗トハ俗ニ云山伏ノコナ
リ羽州大沼山修驗竇尊ノ說

ニ理修驗徳ノ文ヨリ出ト云リ光明寺ハ
武州幸手不動院ノ末寺ナリ開基未詳
り者也ト

行者トハ役行者ノヲニテ名ヲ小角ト云元亨釋書云役小角者公役氏今之高加茂者也和州葛木

郡茆原村人少敏悟博學兼鄉佛集年三十
二棄家入葛木山後載母於鉢沒海入唐

名山トは故とおむと達小

世傳小角常ニ木履ヲ著テ嶮岨ヲ行フ平
地ノ如シト故ニ此像ハ必ス著履ノ形ヲ作
ル又世說ニ謝靈運屐ヲ著テ山ニ登ル
フヲ載スコレラノタキ入ナルベシ

別版
あふゆる岸さのれくよ佛頂和専山也汝あり

雲閣すあり那須のうち小河にて深宗すり佛ひのあはれを東船川
長於之子す佐ノ佐ノ源一とおれり希禪が源長於之子ハお乃庵と云ひタニシ田町だる至
後山す岸す小河と松林巣一と黒小河付紹トと巣と
山中不居橋す
續玄の纏モモサニ今俗ねぬとぞくいせぬうりふつみ海川
乃羅山と申すとあるすと峰かくらぬ云哉云
左方小河とせば某もうりふと峰をめぐらす

泊ある十景有る而橋と渡て山門入雲谷ちうりや
一ト云々傳挽あり所謂十景ハ玉机峯、玲鏡岩、水分石、龍雲洞、
木橋、瓦磈橋、瑞雲橋、涅槃橋、梅船橋、三水ハ神龍池、嶺虎
井頭、寺泉ナリト京師下岡崎蝶夢坊丈通ニ云越セリ山
門ハモト一山ニ入處ノ門ヲ云釋氏ハ專閑寂ヲ貴ミ
山居ヲ事トス故ニ山号ヲ稱シ門ヲモ山門ト名シクト
一說ニ山門ハ三門ノ誤ナリ寺門ハ
貪瞋痴三毒ヲ防ノ義ヲ取ト云リ

さよのれハ乃
柳原

妙禪師の花開法雲法師乃右衛門と云ふもの

妙禪師ハ中華宋朝ノ僧ニテ高峯ト云山ニ處生涯戸
ヲ閉テ出ズ法雲ハ法運ノ誤ナルベシ石室ニ龍馬糞
ヲ焚キテ煮テ食シ僧ニテ何レモ禪錄ニ委シ和漢三
才圖會云禪師號ハ後宇多天皇朝始於建長寺道隆法
師稱ハ起於後
秦鳩摩羅什ト教主不たり
此石ノ事ハ前ノ玉藻
前ノ下ニ見タリ丁說

前ノ下ニ見タリ一說

罪を擡ぐる初めもあらず

山出めに思人詣でのあす入がる里上の旅人と画さし
と申上小船す今加別令渾成化處の函中より蓋むてハあ
殺生石ハ温泉のむね山陰か何り 源有石硫黃其泉則
温トリ又清あわづの柳ハ萬神ノ里ありて畠山川
云リ

の郡守戸部某乃署今ナハ柳井ノケトシノ立
より侍フル 諸事あづきを奉柳ハありの事少乞の事ある事
少々柳井ノケモトニシテアリトニシテ侍りフル 是
より一ト社名ありトヒトト大人施行柳井云訓也の傍證による事
柳井ハ葛籠乃高の山もがき而然うと烟のやすハ懐古も乃被りて
まち居在停よ御る其の跡ハ近來の取て取れし物甚しき葛
地俗ニ高里有レ戸部ハ民部ノ唐名也但此戸部ハ苗氏カ

因一枚挿し之をも柳の几

けらちじだせハ七みまうく立あれと申様あるナ
柳葉よりてハお乙女の立ちよみよも勧モ曰く立よ
あチ小豆みゆ中ニハ云ふおよハすかぐ一タ
秋風情うき立てるとすレバ假想ふあり乃ず
を文了あらわバ一の風景と見ひ一尔早乙女
の因一枚枯るだけ柳がりとテ下涼一て今立
きのや衰みと食事お拜業あはん一是ゆく
前當社はあゞ又名ね乃ちどう仰生もよくと申候

仕方ども索一無小鷹

仕方とも奉事一卷の書

ふかとあさと日暮の便
白川の關よりのゆにて
はまくと美利の入口あ森の名古屋
左家右一〇拂ざるふりありづ

白坂とよみの東より下野と陸奥やの境より境乃の御と二
社並びたり南より北から陸奥松村と云ふ所古よりの
深泥沼あるを今より川と云ハ
柳原が其株下ふく驛者あり いふべく都へと役者もあ

相送集 便所へひやうておへ告げん
之はか川乃せむとあらと至る
之開け一木ノテ 蕁子
廉不破を二實と云か川の実伐の事
本家が此事

二開の一事を語るハヽアビリテナムズ
を云或ハ通ドテ
風簾風櫻尔假る秋風と耳子歌一
格指也 那セハ五あれトシキ事
あゝじのせ也波源 無因清輔袋艸子ニ云能因實ニハ不下ト向奥州
爲詠此歌竊籠居シテ下向奥州之由風聞云云一度下
向之由アリ於一度者實歎書ハ十嶋記古今著史集云
然因ハソノセモナシタクシモウカモチルバヒシ代前小左あ

セキントリニトロアーモニア人でもあらず久しくあらゆる
事と惡々はよろづりすは津東北のうへ一時りの次より

先づおとせ被
ぬ縫と併す

伏見の山中川の景
秋宗

まゝ葉乃枝叶のありてあくちのハセ改め但を又改め
リルハ改め仕事のある事ハあらずと加々ると
トモ一ハリシのどく天體と云ひあるべし即の事乃向ぬリ
キ哉矣スミと云ふ人一がリルハラのを乃サ次第花の咲むる事
多る極相也あらん阿乃閑吉原通

櫻痴の本山あ漫遊記

其のまゝの如きを人に教へて居たば
文章とあらん人多き ちやむる人間がする
事もあらずとすが——

ありやんちゆりか
多と川の冥^{儀式下性} 古人冠と云ふ衣冠と改めて名と清補

の筆手すりもさうめをかへ——とれ
清輔信州守_{シキ}田方半國一
行ト云者陸奥ニ下向之時

白川、關スグル日ハ殊ニ裝束ヒキツクロヒムカフト
云云人問云何等故哉答云古曾部入道ノ秋風ゾフク
白川、關ト讀レタル所ヲバイカデケナリ

二テハ過云云殊勝事歟古曾部入道ハ能因ヲ
云傳ハ下ニ見タリ

アホトモ哉リ云の假アホトモ川ハ阿木深川と云奥列往キホ
アホトモ川を渡るアホトモ川と相西乃焉より流る名アホトモ
朝々やくあよあよアホトモ川のあひのりとは左アホトモ川はねるく
ハウヨウヤウアホトモ川アホトモ川高野傳書左アホトモ川はねるく

六メ四石桙相馬ニ春社ム云は根川の山と云黒城ね
ササギアホトモ人のあひのり勿修 カケルヒトミシトアホトモ山の波ミモ
アホトモ多所アホトモハム カケルヒトミシトアホトモ山の波ミモ
アホトモ川の聲ミモアホトモ小者と尋てキモ須加リトモ

風流セモ一矢やかくの因桂

奥引の因アホトモハ生仏と云自ノ法師乃能キ
トモ傳シメけ生佛ハ重宗也修モ吸一と付て琵琶

アホトモアホトモアホトモアホトモアホトモアホトモ
猿第三とつでけてニ事とか一け三事附
猿高志氏山深ミ岩

是處の傳子の假

猿アホトモ山もつゝやと間ヨシモアホトモアホトモ
アホトモアホトモアホトモアホトモアホトモアホトモアホトモ

間寂ノ義ニテ物靜ナルヲ云

アホトモ高志氏元亨釋書云釋行基世姓

江奉善菩薩の高志氏泉州大鳥人天智

七年生及出胎胞衣裹纏母忌之弃縣樹
枝經宿往見出胞能言父母大悅收而鞠
育十五出家居藥師寺基事行化遇嶮難
架橋修路穿渠池築堤塘州民至今賴之
王畿之内建精舍四十九處諸州往往而在
焉天平七年爲太僧正此任始于基二十
十年正月皇帝受菩薩戒乃賜號大普
薩十月二十日於菅原寺東南院右脇而寂

廿の入ヲアヌササニシムヤ軒の聚

萬葉詩集下卷佛敎云古事記傳殊共喻どり
義而ト一多ク免學義向ム付焉ナリ海部
云志

也レ

桂皮桂皮ノ味と出るの原の山と離れてあそびの山也 桂皮ハ日本日和田あらう
アリ一キやあらうの山を安積山と考。御移郡あく今當お高とあれ
菓店の簷下小山の井あ梨け上石山とひそが山と云小山あり
新古今小説集と見るハ誤也 東京府城北山東也
又ある山の井をあさくハ人をもふらのうハ宋せ 岩野より源多
一、つゝ川比もやをもあらバ あさう乃源も名所也て古事多
の町乃らもみきや里人よ御りきうつもハ萬葉子ノ菓乃事と
云々菓とは今の古菓もあり後世民有ト福せ菓をりハ源
也れど菓と名付く有ふれ神也こもハ源菓菓と云々も古菓
と称ド是をりケル也一其名稱も云或人云福乃仲みち也

のかく小く力り氣附ニ五月五日夜ごとに菓とぬ至シル也あ
ムく是と云ふ其と云て處の店の店の店の店の店の店の店の店の店
也一岁とふくとあくと一すちのれと放中將の因被
我拂とさきくよ幸也や先拂くも我拂くも常也拂り我拂を
学園ハあむめあづモ一歲や待りととも付りさあくばらさ
の桂泥乃花づくとあもあバテ拂と拂りと拂一拂りかく
ふさうもて付りと我拂えり中ねの拂飯とは實方花事と
拂拂の拂拂の拂拂の拂拂ハ山一一本松より音子モレ
ふと称す、ま葉子拂飯也

黒塚の巣屋一尺

二本松ハ狹翁もく丹羽家乃城下を

もと見ても名所あり、於此集、うちのく乃安室のものもくつて、千巻
おりのものばかりと接すれば、中華乃依徳子情文と寛家と
云類すて皆詠歌を樂○又拂拂の千巻、黑塚乃くもひね小いれ
紀列那翁、东光坊祐菴の悪鬼と伏ぎ、もけあつて、のうぢゆす
本州足立郡大字の高木と拂拂の千巻もいへずとも、うだにハ

源氏の御事は是亦足立殿の原形也一を今大もの阿小東
光孝と云はば福也よりからち東光也が祐之の御奉書も又協奏
けむのうへうけ御也不今御存すと云う安達と是主と糸訓
力也もとより一へとすとひよのあら美列の御子御得りと
福也と宿るあくいはあゆりから也乃んと約く事
の事也後源氏は東の御事と板食奉仕飯下あり猶と云はれ
世小福鴻経と云はて不及ひきび乃里と云く皆信支
那より云々家と相、古々みちのく乃ちゆくとらすり達也と云ふゆくと
ありふ家めくあく尔方原也 お松君小のくありひまわとまくせん
うちの美林高のふくらすり御法性也かと云ゆくありく名ねゆり
今後相よきからずと云染絹と出でかや、幸と慕仰と云ふぢすとハ陰奥
石目交ハお嬢の中小あふま乃葉と傳ぐり、幸と慕仰と云ふぢすとハ陰奥
伝承歌ふすりゆくゆく相乃名ありおちくと云まきりのハ
すきくと云程の御事と傳承歌ふすりゆくと云ま
平元にて総行^王アリヤーある故ありうりナシ芭翁と云ふ御事御布を
あり一年貢ふせりタクモエ青天金井奉アリと云八雲
拂拂もと恐ふ字を終示
フナリモ相ありと云

自の備乃ワタ一とゆく。あがの里より殿の上へゆる。因多色少く名をすハ無す。殿の
上とて名をす。七色し姓遂の羅拂。佐藤、吉田の幕内と
庄内ハ秀衡の孫也。信史邪と頼一信夫、
庄司佐藤元治と云。太極冠の商次信惠。信の父也。板塀の里居地
と云ひて居のへり。ト丸山と云ふ。ナニモ御事。け三事も皆

又うきの古事記の一節乃て碑とある中にも
二人の娘のうち一児を殺す
二人の妻が甲冑と本隊の色あわせの色を次に傳へ
我死乃後二人の婦が甲冑と著一軍我の糾ひとく
遺生老母と對ひて云ふ和漢三才圖會云寺有
竹二本、節間共相等傳曰兄弟所持一本旗竿、挿地活生

按ルニ疑クハ
後世好事者コ
レヲ植ルカ此
什今ハナシ

藝文の不存も亦さへ
藝文は、常の後陽樂
山水、毎風景必造観山、置酒言詠終日不倦祐死後、襄陽
百姓於祐平生遊憩之處建碑立廟歲時享祀其碑者
莫不流淚杜預
因石爲墮淚碑

類書纂要云、武人以端牛王用武之處、爲
揚之技盡爲闢勇之戲、藤森社緣起云、天應
每年五月五日祭神、其時在地之神人鑿
甲胄帶弓箭、自余以降、小男兒帶作太刀等、
以菖蒲飾之、菖蒲大不挾スル、菖蒲ハ勝負
又、按ズルニ此日鍾馗ト云者ノ貌ヲ懼ニ
画テコレ建ルハ、黃帝蚩尤ヲ殺テ後ニ
其形ヲ旗ニ画テコレ良間ニ建テ以
年中、異國蒙古責來、被祈由當五月五日、
太風吹而翻波浪、蒙古悉滅却黒以此因緣
每五年五月五日祭礼神事時在此之神人鑿
甲胄帶弓箭、自余以降、小男兒帶作太刀等、
以菖蒲飾之、菖蒲大不挾スル、菖蒲ハ勝負
又、按ズルニ此日鍾馗ト云者ノ貌ヲ懼ニ
画テコレ建ルハ、黃帝蚩尤ヲ殺テ後ニ
其形ヲ旗ニ画テコレ良間ニ建テ以
耶氣ヲ防ムコレ蚩尤旗ト云ト古書
ニ見タリ、蚩尤旗ト鐘馗ト音近ニ依テコ
臣ニテ帝ノ夢ニ來リ、疫鬼ヲ食ノ、說ハ唯
逸史ニ載ルノミテ正史ニ見ズ故ニ
古人コレ論じテタレカナラストス
レヲ誤ルカ勿論世人ノ云鍾馗ハ唐玄宗、
耶氣ヲ防ムコレ蚩尤旗ト云ト古書
ニ見タリ、蚩尤旗ト鐘馗ト音近ニ依テコ
臣ニテ帝ノ夢ニ來リ、疫鬼ヲ食ノ、說ハ唯
逸史ニ載ルノミテ正史ニ見ズ故ニ
古人コレ論じテタレカナラストス
余波ハ又波餘ト云國語ニ見タリナゴリト和訓
ノ斯ノコリノアリ桑折ハ往還宿也名所ニハア
羈旅の余波つゝもアリテ帝乃の羅入

也。余波ハ又波餘ト云國語ニ見タリナゴリト和訓
ズ羈旅邊土の行御格身參常の飲食念の羈旅
ハ道ノ爲ニ身命ヲ顧サルヲ云無常ハ定ナキアリ捨身
行脚ノ說ハ前ニ記ス邊土ハ片田舎ノ土地ナリ捨身
何レモ儒家ニ立ル所觀ハ心ニテ思ナリ伊豆の條成
テ視ヲ云念ハ心ニ絶スと思ナリ伊豆の條成
ビ伊豆の入ヲ同一塞の地アリ、伊豆の條成

とおきの御入をバ前中柏家方の跡ハリ
くのやくあんと純物山の傍り四寸のさかと云行
物とすず白石乃体と伊達家の臣片食小十石、此成
すれ郡ノ字ハ或ハ庄郷等ノ誤ナルベシ笠嶋ハ郡名
ニアラズ宮三万ハ八雲湯枕の云一領たる源平尹云孫侍後
宮也母左近源雅修云女右中納西に位下陸奥守長徳
10年十二月於伊國卒葬原系園ハ長保元年正月大
日於佐多陸奥卒、正月も事と云ゆ相子又云け寧方
が成と因内の邊上人玉子阿リ一び歎上かくは淨と一び
死乃冠ば笏玉手すカ有され一とゆぬ体玉て冠と考
神うきあノセタヒと云ふとあらずて是ハかの御ゆゆくの
礼冠玉ひひゆんとヤマリタヒ賓方ソヘん方ふくも
あゆみあまく神タヒと云ふと云ひては、之ハ
賓方とバ玉枕又カクモトと云陸奥守小ちては、之ハ
アルつゆナウリオサキビスくふうアヤ一人之神
抄本ハ、の内將もそのへ乃とまくく君もあらう思ふ

かをすやおもてのほ
仍く陸奥中將と云ふと記す、この正室一婦と云ふ者也名所
を犯ゆの社へて其落 さむりは金を湯舟の云或花子
宍方坐浴の道祖神のあと下る有くして重り故にリハ狹
あつて馬車の坐て宍方率す云々今不宍方の廟に社の二
ノノ木立とえりやれんのすまよハ彰古今之哀傷郊外ナシのく
く處に坐ゆ小宍方が居様とてヨリ此不すと申す事あり
と見ゆくちとをぬきあらうとぞ先
まくうの落成と云ふ事あり

別後
岩波木やうら
福島久々館乃り仙
志水の後山をもる

武隈山寺より和歌を乞ひ候ハす。松也左衛

昔藤原元善任國時館前初所植松也トニホツル
トハ以迄モケテ名のむらをめぐるを如人云々と云々と考
先能國法師号ひひ畧中名取川の橋杭よりそぞらゆ
すりかどあれをもやねせばしほもとハ源より
能國ハ百人一首翁云橘諸兄公末孫橘忠望孫肥後守
元愷子也仕長門宗和漢三才圖會云能因後冷泉院朝
人肥後守爲愷男出家名古曾部入道初爲肥後進士時
入長能家受和歌指南ヲ故ラ以テ古曾部入道ト稱ス名トモ川
の橋杭ホシノハシハ和漢三才圖會云孝義任國時剪テ
之用爲名取川橋トねハ学び近とすテは医病ヒヤウと云の
とくくや亦ハあくん能國
別辰名取川と波々仙翁入名取川もタチカツ古事記一仙翁ハ奥州乃村伊達
家扶助タマシムあや毛ぬくはや旅者とひきゆ
都令のむすり

あや先ゆくりと五月五日と云此日艾菖蒲ヲ用ルトハ按
ルニ歳時記云此日採艾爲人縣門上以禳毒氣又云以テ
父爲虎形粘艾葉戴之艾虎ト云本草綱自云是日切菖蒲
漬酒飲之或加雄黃少許除一切惡ト是等ノ遺習ナル
ベシ三十才圖會又云太平十九年詔曰五月五日百官諸
人須掛菖蒲鬢如否者不許入宮中拾芥松云此日主殿
寮内裏菖蒲殿舍于菖蒲高接脚の萩萬りありて云株也ハ宮
有りあればあら定立す事体のくじとあつた本萩ありてあり
風とよけこと思はれりゆゑて號はけか古き多一〇連を產
在哉子秋萩の古萩すもむをアヌキハリとみゆきを生すりと
とちみど載て置ふ云けう乃翁ノイ萩も一年ヅリテ枯る必
きさくどち枝ふ焉と云うす云云け萩ハアシモカシモ本萩
もうし枝子もむに枝生多くも枝小花さくあるす高脚處
わざの本萩と云ウナ葉一柄生すがふ萩子ハ山地の二種至
て山萩ハ枝削く根も大きを故やうしのうとよく無る今
尼麻而アモササのササと多くけ山萩多くから作るといふ

トのハナリハ有り或ハ山薪と云ふらどアヤシムラト
 づくはヨリの夢キバ木薪ハ則ち山薪と云ふ也トカサ
 ヨリササヒモ色のうち子刈ホ先ハお三一年云々其幹を
 み枝と生一木小枝ありツヤダカクアリ山薪即薪ノ前
 も回ドル事と云年刈小リモ田模也つドの
 やれも又トウハシ葉をもつ木亦うきモ田模也つドの
 異なに之ひ候、う也モ因トニ即彼ドの岡皆名重
 一の事ニ而ヤモモレく後成阿セミハ馬醉木と云本又の所
 ちい、別ちあセほの事ナリヤモトスヒトニハ昔者其の御
 ナシナシヒミの事トハよみくル古タタキモキモヒミの
 本木下を極るモトニテノ山脚ナリ十尋の高さ行
 トニシモトニテノ山脚ナリ十尋の高さ行
 おくのゆきハ名所子母十尋乃里ハ名所新古今文ト
 人もその浦よりあちをのべつゝとく沿る所の根タク橘萬角
 十尋ナシ舊苔蘚と謂く國也。ふぶすと云うもの
金葉水

トのハナリハ有り或ハ山薪と云ふらどアヤシムラト
 づくはヨリの夢キバ木薪ハ則ち山薪と云ふ也トカサ
 ヨリササヒモ色のうち子刈ホ先ハお三一年云々其幹を
 み枝と生一木小枝ありツヤダカクアリ山薪即薪ノ前
 も回ドル事と云年刈小リモ田模也つドの
 やれも又トウハシ葉をもつ木亦うきモ田模也つドの
 異なに之ひ候、う也モ因トニ即彼ドの岡皆名重
 一の事ニ而ヤモモレく後成阿セミハ馬醉木と云本又の所
 ちい、別ちあセほの事ナリヤモトスヒトニハ昔者其の御
 ナシナシヒミの事トハよみくル古タタキモキモヒミの
 本木下を極るモトニTEノ山脚ナリ十尋の高さ行
 トニシモトニTEノ山脚ナリ十尋の高さ行
 おくのゆきハ名所子母十尋の高さ行

奥細道苦蘋抄上



中華人民共和國圖書出版社

中華人民共和國圖書出版社

